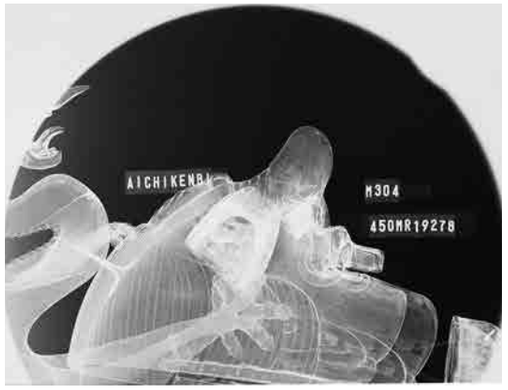
木村定三コレクション仮面目録

（作品解説）
町田市立博物館　田邊三郎助
鶴見大学　小池　富雄
共立女子大学　長崎　　巌
京都国立博物館　久保　智康
（名誉研究員）

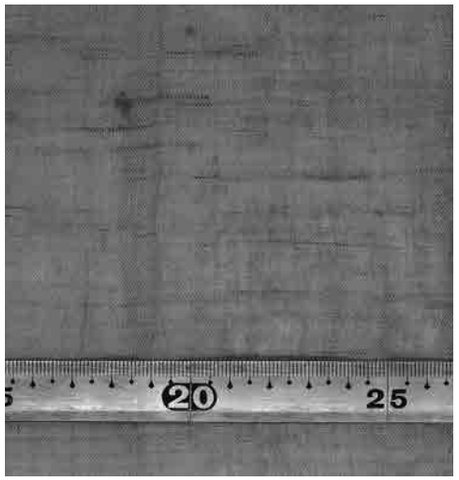
1　M304-1　舞楽面・陵王

（面長）32.0×（面巾）22.0×（面奥）21.3
（頭頂で24.0）　　（鼻頂で19.3）
鎌倉時代（13世紀）

頭上に竜をいただく金色肌、瞋目の仮面は舞楽のなかでもっとも普及した陵王の面である。大きく分けて二通りのタイプがあり、広島・厳島神社の竜が立上がって、全体として縦長のものと、神奈川・鶴岡八幡宮の竜の脚の羽が左右にひろがる巾広のものとあり、前者は奈良・平安時代から、後者は鎌倉時代から見られる。この一面は前者の系統ながら、竜の後脚が長く伸びて、面の両耳辺をつかむ形で総体に奈良・東大寺の正元元年（1259）銘の一面とよく似ている。これを納めた木箱も古く、本面は箱とともに、早くに東大寺から流出したかと思われる。比較的保存が良く、眉や鼻下の植毛を失っている以外、当初の姿をそこなっていないことも評価してよいであろう。　（田邊）



X線透過画像　元興寺文化財研究所



M304-2　白（自然色）麻面包

92×93（織幅　35.2）
江戸時代（18-19世紀）

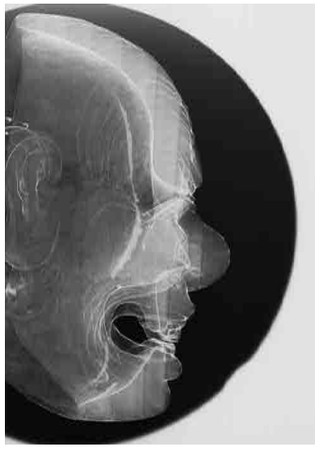
経糸に、太細のあるZ撚撚糸、緯糸に太糸のみの無撚糸を用いて織られた苧麻布。　（長崎）

2　M303-1　舞楽面・二ノ舞（咲面）

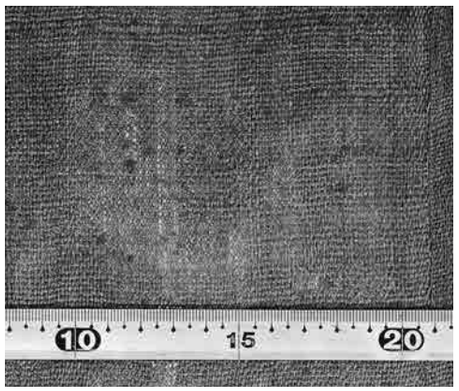
28.0×21.9×16.6
鎌倉時代（13世紀）

舞楽の二ノ舞に使用される面は、全面に皺を重ね笑う老爺と腫れゆがんだ泣き顔の老嫗の対となる二面で、この面は前者に属し、形としては治承２年（1178）の修理銘を有する愛知・熱田神宮や承元５年（1211）銘の愛知・真清田神社の面の系統であるが、写実味がつよく、しかも桐材を用いて平らに仕上げ、トノ粉下地に漆塗りとした裏の仕口など、伎楽面を手本としたかと思わせる作柄に特色がある。箱書の元久２年（1205）の制作かどうか判定は難しく、一応鎌倉時代に比定をしておく。

箱蓋裏墨書「元久二年乙丑三月二日／吉次」、同貼紙に楕円形朱印がある。　（田邊）



X線透過画像
元興寺文化財研究所



M303-2　白（自然色）麻面包

61×62（織幅　32）
鎌倉～室町時代（13-16世紀）

経糸に、太細まばらなS撚強撚糸、緯糸に太糸のみのS撚弱撚糸を用いて織られた大麻。２枚の布を縫い合わせている。　（長崎）

3　M1133-1　追儺面・鬼

30.4×23.4×12.3
室町時代（14-15世紀）

髪を逆立て、瞋目、上歯で下唇を噛み、下顎からは牙を立てる。その両眼と歯牙は金銅板をかぶせ、肌は薄く白下地をほどこした上に赤褐色を塗り、髪は緑青彩か。その表現は鬼の一種を意図すると思われ、袋に記された追儺の面であろうが、それが記す「追男」ではなく、追われる鬼の方であろう。追う方は通常“龍天、毘沙門”といって、仏教の守護神・天部の形の面である。鬼は父・母・子の三面である場合が多い。

この面は広葉樹材を用い、裏は荒く削りのこして素地とする。鎌倉・南北朝期の追儺の鬼としては少しく形を異にしており、作柄も下って室町時代に入っての作かと思われる。

袋墨書「修二會式／追儺ノ面／三ノ内　追男」
（田邊）

M1133-2　紅繻子地松葉橘模様金襴面袋

30×26
仕立て　江戸時代（18-19世紀）
表地　紅繻子地松葉橘模様金襴全補
　　江戸時代（18-19世紀）
裏地　白麻（大麻）。

追儺面「鬼」を収納する。裏地は、経糸、緯糸ともに、S撚りの弱撚糸で、太細が少しある。「修二會式/追儺面三ノ内　追男」の墨書あり。
（長崎）

4　M295　能面・翁（白色尉）

19.0×14.5×8.1
室町時代（15世紀）

鎌倉時代にはその存在が知られている翁舞には四種の仮面が用いられており、その中心となる翁の面はほとんど全国各地に遺っているが、多くは室町時代の作品で、この一面もやや型にはまった温容を広葉樹材を用いて刻み、裏は平らに削って黒吹漆で仕上げるところなど、この時代の作品らしい。ただ上下の歯列を左右に分けて彫り出しているところは異風で、この面の特色である。よく使用された痕跡を遺しており、ボーボー眉は後補のものと替っている。（田邊）

X線透過画像　元興寺文化財研究所

5　M296-1　能面　三番叟（黒色尉）

18.4×14.3×9.1
室町時代（15世紀）

翁舞系四面のうち翁は肌を白色に塗り、三番叟は黒色に仕上げるので、（白色尉・黒色尉）のように区別する。通常対で使用されるので、同作の場合もあるが、多くはこの面のように翁とは作風を異にする場合が多い。この一面も広葉樹材を用いているが、裏は荒彫りのままにのこし、表の皺の彫りなども粗放で、ローカルな趣がある。面のやや右寄りに縦割れを留めた痕がある。これも無雑作である。下顎中央に植毛痕とは別に大きめの孔をうがっている。こうした例は三重県鳥羽市の勝田座にあった三番叟（現京都・野村美術館蔵）をはじめ、福井県に三例あり、そのうちの池田町の立石家の三番叟には房のついた紐が、そこから垂れている。この面の特徴の一として見逃せない。表の白色は分析結果から白土と考えられる。箱は漆塗りで、紐孔に金具を嵌め、蓋表に「翁」と朱漆書するもので、翁舞の面箱としては古く、あるいは室町時代に上るものか。貴重視されてよいであろう。　（田邊）

カラー図版 P.10～12・P.16、P.50～53の保存修理報告書、P.54～60の調査報告書参照

M296-2　黒漆面箱

20.5×16.3×14.7
室町～桃山時代（16-17世紀）

箱は黒漆塗りで、底部の左右長辺の４ヶ所の紐通しの穴には銅合金（真鍮）製の大ぶりの円筒型金具を嵌めている。丸組紐は、現存していない。蓋表の中央には「翁」と朱漆書きがあり、姿は小ぶりで古様である。翁舞の面箱としてこの姿はあるいは室町時代に上る形式を伝えているのであろうとみられ、貴重である。箱の内部、身には打ち曇りの紙貼りで、紙の破損した下からは桐材白木の木地が確認できる。　（小池）

6　M297-1　能面・父尉

16.5×14.0×6.4
室町時代（16-17世紀）

翁舞系の面のうち父尉と延命冠者の出番は室町時代の末頃から途絶えてきて、その後は特殊演出のみに用いられるようになった。従って室町以後の作品はむしろ少い。この面はちょうどその境目の頃の作品と思われる。桧材を用いて、裏はほぼ平らに仕上げ、漆塗りとする。表は型通りの彫り、塗である。　（田邊）

M297-2　黒漆面箱

25.1×25.0×9.0
江戸時代後期（18-19世紀）

他の箱からの転用されたものと思われる。
（小池）

7　M300-1　能面・十六

20.6×13.7×7.3
江戸時代（17-18世紀）

「敦盛」の後シテが用いる面で、16才の若さで死んだ少年の貌を写す。「知章」「経正」などにも用いられる。この面には枠なしの出目印（緑青入）が押されており、この印は越前出目四代古元休満永のものとも、兒玉近江満昌、あるいは弟子出目古元利栄満のものともいわれ、印自体にも大小があり、いまいずれとも定めがたいが、作は江戸時代の能楽盛期の典型的な制作のものである。この種の作例は比較的少ない。

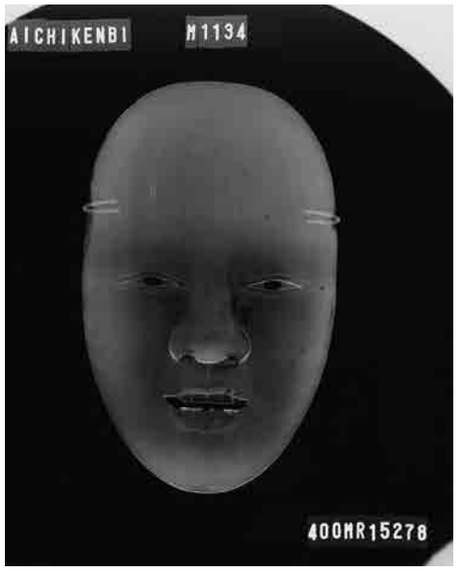
（田邊）

M300-２　紅地竹鶴模様緞子面袋

25×19
仕立て　明治時代（19世紀）
表地　紅地竹鶴模様緞子
　　江戸時代（18-19世紀）
裏地　鼠平絹　明治時代（19世紀）

（長崎）

写真提供　国立能楽堂　撮影：青木信二



X線透過画像　元興寺文化財研究所

8　M1134-1　能面・増（女）

21.2×13.4×6.7
室町時代（15-16世紀）

能面のなかで若い女の貌を写すものに小面、増（女）、若女、孫次郎などがあるが、これらは髪際のおくれ毛の表現によって区別されることが多い。この面は増（女）のそれで、小面よりやや年上の、落ち着いて　貴品のある表情に、”天冠下”と称され、品格を求められるこの種の面の条件を満たしている。

裏にある刻銘の体裁が文亀４年（1504）の宝生会の姥や野村万蔵家の狂言面・賢徳のそれと近似しているところから、「文菴」を文亀の誤りとみて、同じ作者のものと考えられている。「文菴」は「文安」の異体字と考えられ、さすれば文安４年（1447）となるが、この面の作柄はそこまであげて考えにくく、むしろ宝生会の姥の作柄にちかい感があり、「文亀」の異体字の誤記と考えた方が良いであろう。「田作」については、これらのほか、永正５年（1508）桜宮聖出雲作の男面（滋賀・油日神社蔵）に「田作福大夫神之面」とあるのが知られているが、その実体は明らかでない。

面裏刻銘「田作/文菴三歳/二月廿日」
箱付紙ペン書「永（氷か）見作/文亀
三二月廿日/田作トアリ」
同裏に「才六号/三夜荘」

（田邊）

カラー図版 P.13～16、P.50～53の保存修理報告書参照

写真提供　国立能楽堂　撮影：青木信二

M1134-2　紅地蝶立涌菊模様繻珍面袋

23×20
表地　紅地蝶立涌菊模様繻珍
　　江戸～明治時代（19世紀）
裏地　紫平絹　明治～大正時代（20世紀）
能面「増女」を収納する。　（長崎）

M1134-3　秋草蒔絵面箱

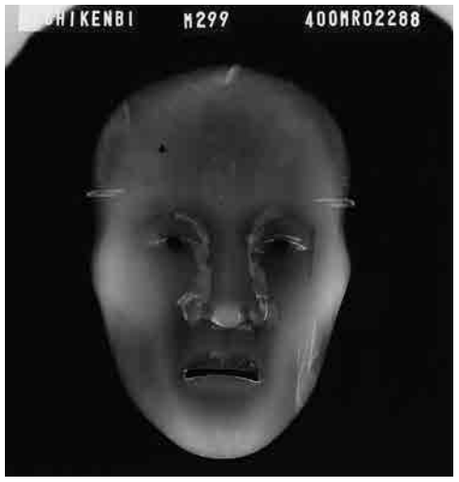
24.1×16.7×9.2
江戸時代（17世紀前期）
別報告文（P.30～P.32）参照　（小池）

紐掛金具

銅板製鍍金。鐶座は丸形。表面に五三の桐紋をやや太めの蹴彫りで表す。地に細かな魚々子を密に整列打ちする。鐶を通す鐶台はやや扁平な球形。桐紋の形と蹴彫りの特色から桃山時代末～江戸時代前期頃の制作と見られる。（久保）

9　M299-1　能面・痩女

20.9×14.0×7.0
江戸時代（17世紀）
表の彩色がほとんど剥落し、凹所に白下地を僅かに残すのみで、古色におおわれている。桧を用いて薄手に、少しく刀目をのこして刳った裏も同様に古色を呈している。近赤外線写真で見ると、おくれ毛が上方２本で始まり、途中から４本となるようで、それは孫次郎を思わせるが、いずれもたどたどしい筆使いで、とても当初のものとは思えない。口を僅かに開いて上歯のみをあらわす形は霊の男女のもので、その面長な骨格は痩女がもっともふさわしいように思われる。裏面の仕口などからみて、その制作は江戸初期を下るものではあるまい。そこにある花押は、目下特定しがたい。
裏面墨書花押。　（田邊）



P.56～63の調査報告書参照

X線透過画像　元興寺文化財研究所

M299-2　紺地立浪模様金襴面袋

24×21
仕立て　明治時代（19世紀）
表地　紺地立浪模様金襴
　　江戸時代（18～19世紀）
　　能装束の半切または狩衣の残欠。
裏地　紺木綿　明治時代（19世紀）
（長崎）

M299-3（M300-3）黒漆面箱

26.7×19.5×12.2
江戸時代（18-19世紀）

痩女（M299）、今若（M300）２面入り、他の箱からの転用されたと思われる。　（小池）

鐶座

梅花形の鐶座金具。金銅製地板に梅の花弁を鋤かした銅板を重ねる。鐶を通す鐶台はやや扁平な球形で、鐶とともに鍍金は施さない。このような鐶座の構造は江戸時代中～後期の釘隠などに類例が多い。　（久保）

10　M1131　狂言面・狐

21.2×16.0×15.3
江戸時代（19世紀）

狂言面の動物のなかでもっとも多く遺っているのは狐であろう。稲荷の神使として能楽成立以前からあったと思われ、古作は霊獣らしく、品位をもった簡潔なつくりであるが、江戸時代にはこの面のようにいかにも動物らしさを写実的に表現したものが多くなる。下顎を別につくって、口を開閉できるようにし、眉や口廻りに植毛する。この面は材も桐を用いて軽くし、後縁に布衣を留める孔をめぐらす。肌色は不明だが、耳の内側と舌に朱をとどめる。上歯６本を釘留めしているが、これは後の所以であろう。
（田邊）

X線透過画像　元興寺文化財研究所

X線透過画像　元興寺文化財研究所

11　M1132-1　狂言面・鳶

14.5×16.2×14.0
江戸時代（17世紀）

箱の貼紙に“八咫烏”とあり「阿蘇神社より宇佐神宮へ・・・」とあるのを信ずれば、神樂面ということになろうが、樟材を用いて鼻を大きくとり、下顎を別製として口の開閉を自由にする造作や、瞳孔の縁に金銅環を嵌めていたような痕のあることなど、神樂面普及以前の制作と思われ、一応狂言面の古作と考えておく。動物をあらわす狂言面は愛媛・東雲神社や静岡・佐野美術館に古作を多く見、それらが実にさまざまな表現をしているのが参考となる。特に東京・山本東次郎家の鳶はこのような面を近世風に仕立てた感がある。

箱付紙ボールペン書「天平八咫烏面/阿蘇神社より/宇佐神宮へ/後宮崎県西臼杵郡上生/旧家　一原」　（田邊）

M1132-2　薄紅平絹地七条袈裟残欠（面包）

95×99
江戸時代（17-18世紀）

袈裟の３坪半分を残す。ひとえ仕立て。条・葉・縁・四天・紐座とも同裂。縁や葉は、裂に襞をとって表す。　（長崎）

M1132-3　黒漆円筒型面箱

（径）25.3×23.2
本体　明時代（中国）もしくは
　　琉球（15-16世紀）
塗り（表面）　桃山～江戸時代（16-17世紀）

口が添木式に作られる。またその部分に大小不揃いで非常に鋭い角を残す粒子様のものが観察され、これは骨粉下地と思われる。骨粉下地が使用されていたのは、中国では漢、唐、宋時代、半島では17世紀、18世紀まで使用されたが、我が国では奈良時代に限定される。また15-16世紀、琉球の「丸櫃（まるきせ）」に似る。しかし全体の大部分を覆う光沢があり刷毛目の残る黒漆は近世の日本製と見られ、何度かの塗り直しが認められる。今後の科学調査が望まれる資料であり、木地の本体はさらに遡る可能性がある。（小池）

赤外線写真

12　M298　神楽面・おたふく

18.2×14.8×6.5
江戸時代（18-19世紀）

ふくれた両頬にえくぼを刻み、眼鼻立ちを中央に小さくまとめたところ、厚手に胡粉を塗り重ね、ツヤのある肌を示すところなど、狂言面を思わせるが、振分け髪の左右の端を開き気味にして止め、額中央に下方にとがらせたいわゆる富士額とする女面は、狂言面中には見当たらない。桧材を用い、肉を均一にととのえて、裏を平らに仕上げたところなど、狂言面の作者の手になるかと思われる。神楽面としては上手の一面である。

裏に墨書数字あるも、読めず。　（田邊）

13　M1135-1　貴徳

21.8×15.7×8.1
現代

1135-2　茶地向鶴模様唐織面袋

43×28
表地　茶地向鶴模様唐織
　　江戸時代（18世紀）
　　能装束の唐織の残欠。
　　蘇芳による茶色味の赤色。
裏地　白平絹　昭和時代（20世紀）

舞楽面「貴徳」を収納する。　（長崎）

M1135-3　木地面箱

29.2×22.9×18.1
江戸時代（17-18世紀）

内部に草花蝶籬文彩箋の内貼り。古材を使用して仕立てなおしたものと思われる。　（小池）

14　M301　鉄面

24.8×19.5×7.2
製作年代、製作地不詳

凡例

・本目録は、愛知県美術館所蔵「木村定三コレクション」の中から、仮面類とその付属品の一部を掲載し、解説を付したものである。
・各作品名は、各作品の調査者の見解を勘案して決定した。
・各作品のデータは、掲載番号、コレクション番号、作品名、寸法（センチメートル。染織工芸品に関しては小数点以下を四捨五入した。）、製作年代の順に記載した。
・付属品の枝番は、仮面に近いものから順に付けた

例）M1134(-1)　能面・増　・・・仮面
M1134-2　紅地蝶立涌菊模様繻珍面袋　・・面袋
M1134-3　秋草蒔絵面箱　・・面箱

・本目録は、下記の調査者が分担執筆し、各文末に下記の略称に従って記した。

田邊三郎助　（田邊）
長崎巌　（長崎）
小池富雄　（小池）
久保智康　（久保）

・一連の仮面調査は2006年（平成18年）より始まり、愛知県美術館学芸員の鯨井秀伸、深山孝彰、長屋菜津子が引き継ぎを行いながら担当した。上記調査者以外にも、内田雅之氏（熱田神宮宝物館）、保田紹雲氏、門脇幸恵氏（国立能楽堂）、淺沼毅氏（京都国立博物館）、佐々木重洋氏（名古屋大学）の助言、協力を得、また池田素子氏、田村明子氏、加藤里英氏の調査補助を受けた。

編集　愛知県美術館　長屋菜津子

3　木村定三コレクションの主な仮面 （本文P.33～48）

1　M304　舞楽面・陵王

2　M303　舞楽面・二ノ舞（咲面）

3　M1133　追儺面・鬼

6　M297　能面・父尉

4　M295　能面・翁（白色尉）

9　M299　能面・痩女

10　M1131　狂言面・狐

11　M1132　狂言面・鳶

12　M298　神楽面・おたふく